様式１－１

［概要報告書］

実践校に関する事項

学校区分	学校名	学校長名
高等学校	和歌山県立熊野高等学校	左　近　晴　久

学校所在地

〒６４９－２１９５　和歌山県西牟婁郡上富田町朝来６７０番地
TEL　０７３９（４７）１００４　　FAX０７３９（４７）４２００

担当者名	役職名・担当教科
酒井久視／宮地良斉／河野剛士／田城賢司	教諭・地理歴史科

〔**学校の概要**〕

和歌山県の中央部、田辺市・白浜町に隣接する上富田町に位置する。古くは“口熊野”とも呼ばれ、熊野古道が本格的な山道〔中辺路〕に分け入るところである。町内の八上王子・稲葉根王子は世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に追加登録されており、熊野参詣道について学習する意義は高い。
本校は１９２３年紀南農学校として開学し、その後、熊野林業学校と改称し、以来林業を学ぶことができる高校として発展してきた。平成１６年に総合学科高校に改編、平成２０年に看護科が移設された。令和４年度には創立百周年を迎えた。
純朴でどの子もよくあいさつをし、部活動に積極的である。
また、町内唯一の高校であることから、上富田町と学校クラブ・サポーターズリーダーを中心に、イベントへのボランティア参加や合同防災訓練、地域の高齢者への声かけ等を行っており、地域との関わりが深い学校である。
なお、１学年では平成１６年以来、学年の学習として熊野古道ウォークを実施している。

研究実践に関する事項

対象者児童・生徒	学習支援者等（延人数）	主な活動場所
学年２・３年生　　５７名	職員　４名	会議室

実践研究テーマ

世界遺産・熊野古道と地域の歴史・文化

実践教科等名	単元名
学校設定科目 社会文化研究（地歴公民科）	地域の歴史文化

〔**キーワード**〕　世界遺産 熊野古道 情報発信 地域 観光

〔**単元目標**〕

(1)世界遺産が設けられた経緯や意義、世界・国内の遺産の状況など基本的な事項について理解する。
(2)「紀伊山地の霊場と参詣道」に関する基本的な知識について学ぶとともに、世界遺産としての熊野古道がどのような価値を持つものなのかを理解する。
(3)(1)(2)での理解を踏まえ、現地学習を通して熊野古道の魅力を体験的に学び、高校生の視点からその魅力や価値、保全のあり方について考える。
(4)フォトエッセイ作成を通して、これまでの学習や体験で得たことを情報発信する立場からまとめる。

〔**学習に当たった全学習時間数**（世界遺産学習に関わる時間数及び　学習活動名／教材名）〕

全体　５０　時間　（「世界遺産・熊野古道と紀南地方の歴史・文化」　１０　時間　）

〔**地域および文化財管理者等との連携の実施状況**〕

和歌山県世界遺産センター　　世界遺産講座 次世代育成事業
現地学習

様式１－２

［概要報告書］

実践に関する事項

〔**単元指導計画概要**〕

	主な学習活動	学習への支援	評価方法等
1	事前学習Ⅰ「地域の神社を訪ねる」 参拝の作法等を学んだ後本校近くの岩田神社を見学した。	本校職員により実施。 生徒にとって神社はありふれた存在であるが、改めて訪れることで地域における信仰の大切さに気づかせる。。	〔知識・技能／主体性〕 ワークシート 見学時の取り組み
2	事前学習Ⅱ 「山伏と日本のこころ」 山伏を通して、日本の基層文化でもある熊野の信仰や文化について学習する。	本校職員により実施。 山伏の衣装や持ち物に象徴されている意義を読み解きながら、修験や熊野の信仰が日本の基層文化につながることを実感させる。	〔知識・技能〕 〔思考・判断・表現〕 ワークシート
3	事前学習Ⅲ 世界遺産クイズ 導入として世界遺産に関するトピックをクイズ形式で出題し、各グループで解答する。	本校職員により実施。 親しみやすいトピックを選び、世界遺産に関する興味関心を高める。。	〔知識・技能〕 〔思考・判断・表現〕
4	世界遺産入門 「紀伊山地の霊場と参詣道」 世界遺産センター職員による講義を通して、「紀伊山地の霊場と参詣道」について、基本的な知識やどのような価値を有するのかを理解する。	ワーク時における巡回指導を行うとともに、活発な学習を促す。	〔知識・技能〕 ワークシート
5 6	熊野古道現地学習 高校生自身が感じる熊野古道の魅力をテーマに、世界遺産マスターの方々によるガイドのもと滝尻王子から高原熊野神社までを歩く。熊野古道の魅力を体感し、「熊野古道フォトエッセイ」作成のため、写真撮影等を行いながら情報を収集する。	「熊野古道フォトエッセイ」の作成意図を明示し、目的を持って現地学習に臨めるように事前学習を行う。	〔思考・判断・表現〕 〔主体性〕 情報収集の成果 （写真等）
7 8	熊野古道フォトエッセイ作成 フィールドワークでの写真とインターネットでの調べ学習をもとに、生徒自身が感じた古道の魅力を発信するためのフォトエッセイを作成する。 〔２年選択生のみ〕	再度作成意図を説明し、なるべく感想文にならないよう、読み手を意識することや写真からさまざまなことを連想することをアドバイスした。	〔思考・判断・表現〕 〔主体性〕 作成したフォトエッセイ

〔**単元学習の成果と課題**〕

この単元は科目の設置以来、学習の柱の１つに位置づけてきた。事前学習では、世界遺産や参詣道に興味を持ちながら、その意義や価値を理解するように工夫を行っている。その上で、現地を歩くことによって、生徒自身の感性と学習内容が結びつき、より深い学びにつながっている。

フォトエッセイ作成は半ば恒久化した課題となっている。スマートフォンが普及し、写真撮影は生徒自身の感性を表現するツールとなっており、現地学習の記録としては有効であると捉えている。

〔**世界遺産学習の効果**〕

学校設定科目「社会文化研究」のねらいに「和歌山の歴史文化を理解すること」がある。

世界遺産学習を設定することで、身近な地域の自然や文化が世界的にも認められた価値を持つことを知り、単に知識としてではなく、継承・保存するべきものとして、地域の文化を理解することができる。多少なりとも、社会参加への意欲も養うことができた。

〔**世界遺産学習の今後の方向性及び改善点について**〕

社会文化研究では上富田町内の調査を学習活動の一環に位置づけている。授業時数の関係から難しい点もあるが、次世代育成事業の成果を町内の世界遺産学習に発展させて、世界遺産を活かしたまちづくりを考えるといった学習課題にも取り組みたい。

様式２

令和５年度　次世代育成事業における学習記録　　［概要報告書　　学習記録・活動写真］

熊野古道現地学習〔令和５年１２月１９日（火）実施〕
　２・３年生１７名（２班編成）が参加した。
　世界遺産マスターによるガイドのもと、滝尻王子～高原熊野神社を歩いた。道中、胎内くぐり等で解説を聴くとともに、フォトエッセイ作成のため、各自が魅力に感じた風景を撮影し、古道の魅力を感じながら、フィールドワークを行った。

《日程》
　１３：２０　滝尻王子
　１５：３０　熊野高原神社

■熊野古道フォトエッセイ作品例

現地学習の際撮影した写真の中から１枚のみを選び、その写真を撮影した理由を通して、熊野古道の魅力を伝えるエッセイ。古道に関する情報は 200 字程度におさえ、写真の説明や感じたことを中心に記述している。
感想文になっているものも多かったが、自身が撮影した写真を見直しながら、過去や外国の人に思いをはせる記述も見られた。

＊今年度は授業時間の関係で２年生のみが作成した。

歩いて学ぶ熊野古道

この写真は森の木々から差し込む日差しが綺麗な写真です。熊野古道では歩いていると、太陽の日差しがちらちら差し込み、木々が照らされ、幻想的な写真が多く撮ることができます。この太陽と森の絶妙なバランスで中和された景色を目の前に、立ち止まらずにはいられません。雨上がりの葉っぱなどに水滴がついて、それに日差しが入るとさらに幻想的になるので、雨上がりの日に訪れた人はそこに注目して見てください。
この写真を選んだ理由は、木がたくさん立ち並び、その中にまっすぐ道があるのが素敵だと思い選びました。

木々が立ち並んでいるので影が多く、とても落ち着いた状態で歩くことができてリラックス効果が期待できます。歩く道はきれいなところもあれば、足の踏み場を確保しながら歩いていかないといけないところもあります。ですが、どの道も昔から人々が足を運び、造ってきた伝統ある道です。その道に足を踏み出し、歩くことは日本の歴史に触れているということなのでその時代を想像して歩くこともできます。地元で身近にある世界遺産を誇りに思い、改めて自然の存在価値を歩いていくうちに知ります。そして、熊野古道の環境維持の大切さを感じ、清掃活動などに積極的に参加してもらえたら良いと私は考えます。

長い道のりではありますが、体力もつき、歴史も感じ、自然の空気をたくさん吸い、心もリフレッシュするので、気分転換したい人におすすめです。なので、家族や友達と気分転換したいときに訪れてみてください。

無題

案内板とその周辺の木々しか撮れていない寂しい写真だが、この地こそ、かの有名な(?)剣ノ山(つるぎのやま)経塚跡になります。古くは神聖な場所とされ、最初の下品下生の門があったと記されていますね。「あった」なので、現在この門は存在していません。「この経塚跡は、経典を経筒に入れ、それを壺に納めて、地中に埋めたところである」とも記されており、その壺は熊野古道館に展示されている常滑焼の壺だそうです。
下には英文もセットでついているので、外国人の人でもしっかり読み解くことができます。安心ですね。

さて。自分が熊野古道を歩いた上でこの写真を選択し本文を書こうと思ったのは、この剣ノ山の案内板にある「熊野本宮へかけて九品の門が建ち、ここには最初の下品下生の門があったといわれる」という記述を見てです。要するに、この地から熊野まで九つの門が建っており、此処にあったのはその「一番目」の門である訳で……。この跡地へ来るまでにも時間がかかるのに、まだまだ先は長いのか…と登っていた自分はこの時点で大層疲れたものです。そしてそれは、かつてこの道を歩いた先人たちも同じだったのではないのでしょうか。しかし同時に、ようやく熊野の山に入ったことを実感できる場所でもあります。先は長いけどもうひと踏ん張り！　と自分も、当時の先人も。奮い立たせるチカラがあるのでしょう。流石神聖な場所です。
先ほども書いたように門こそもうないですが、この案内板を見ると先はまだまだか、よし頑張るぞ！　となるあたり、門亡き今でもこの道を通る人々に対して発破をかけているのでしょう。流石神聖な場所ですね。